

ふわふわと微睡む意識から私を現へと連れ戻したのは、スマートフォンのかたましいアラーム音でも、カーテン越しに瞼を刺す朝日でもなかった。

胴の上を這いまわる生ぬるい感触。その温みが移動すると共に肌を走るくすぐったさ。決して強くないが、腹のあたりを直接触れているようだ。直接……ということとは、自分は何を着ていないのだろうか？ その瞬間、温みは胸の方へと動き、やわやわと揉むような動きを見せる。その時感じた厚い布とワイヤーの感触に、下着は一応つけているようだと思える。

頭が痛い。一体自分はどのような状況に置かれているのだろうか。やけに重たい瞼をこじ開け、瞳孔を左右に動かす。まぶ目に飛び込んできたのは、白い天井のようなもの。恐らくどこかの部屋だろうが、見覚えはない。状況を探っていくうちに寝ぼけた頭も少しずつ目覚めてくる。両腿の上に乗る重み、ギシギシと鳴るシーツ下のスプリング、首筋に感じる湿った息遣い、下着の中に入り込んでくる、手。

「……だ、だれ、……？」

掠れた声に、胸を触ろうとする手はびたりと止まる。ぎしり。自分に被さる影はこちらを覗き込むような素振りを見せる。

「何だ、」

ぎしり。

「もう起きたの」

そう呟く声には聞き覚えがあった。確か同じサークルにいるひとつ上の先輩。あまり喋ったことはないはずだけど。

その不機嫌そうな響きにぼんやりと記憶が蘇ってくる。確か今日はそのサークルで行われた飲み会があった、はず。つまり『お持ち帰り』されたということなのだろうか。

たった今押し倒されていること自体に抵抗はない。元々そういう事象には見境がない方だと自負している。ただ、同じコミュニティに所属している以上、サークルで悪評が回るのは避けたかった。

「せん、……ば、」

無骨な手の動きと息遣いが止まる気配はない。

「彼女、います……よね」

柔らかな脂肪に指を沈めたまま、動きが止まる。元々自分の横にあった頭の気配が、耳元へと近づいたのが分かった。

「この前、振られた」

零れたのはたった数文字だったが、それだけの言葉が腰元にゾクツと何かを走らせる。それが耳にかかった吐息のせいなのか、やけに潜めた低い声のせいだったのかはよく分からない。

「なんでこういうこと、するんですか」

「ん、君が可愛いから。かな」

周りには誰もいないと言うのに、内緒話を囁くようなトーン。顔を近づけたついでとばかりに耳へそつと舌が這わせられ、思わず吐息混じりの甘ったるい声が漏れる。

可愛いなんて、そんなの嘘。流石にこの状況でそれを履き違えるほど馬鹿じゃない。考えるまでもなく、軽い女と見られた心当たりはいくらでもあった。それにしても、振られた腹いせで手近な女を引つ掛けるような人には見えなかったけど、お酒の勢いというやつだろうか。

不意に唇の横を触る手。あ、と思うと、耳朶を食んでいた顔がいつの間にか目の前にある。気づいた時には口元に柔らかなく、生暖かいものが押し付けられていた。軽く吸われ、少し斜めに唇をずらされる。

リップいつ塗り直したつけ、落ちないかなあ。確か今日塗ったのは落ちにくいのを売りにしていた代物のはず。勝手にキスされると言うのに、頭の中は他人事みたいにぬめる唇を感じている。

パーソナルスペースを無視した接触がもたらすものは、スキンシップによる幸福か、踏み込まれたことによる不快感の二択だ。普通はまあ、後者だろう。でも、今の自分ときたらどうか。アルコールの魔力？ 目の前の整ってると言えなくもない顔？ それとも、生来備わっている尻軽気質？ 全身

を蝕むざらついた肌の接触到、すっかりとろけてしまっている。

唇と唇の間から恋猫のような吐息が少し、零れる。いつも鼻にかかったような甘え声とは違う、男の本能に媚びる鳴き声だ。わざとじゃない。自分の潜在意識が、温もりを、愛を、求めようと勝手に擦り寄る。

無意識のおねだりは、どうやら功を奏したようだそれなりに長いこと上半身をまさぐっていた手は、するりと腹を撫で、その流れでスカートの中へと伸びる。

いつだって、いつもは隠れている場所を下着越しになぞられる時は、何となく身構えてしまう。一応『女の子の大事なところ』みたいな意識があるからだろうか。お酒に吞まれて持ち帰られている時点で大事にしているんだろうか、とは思うけど。

「なんだ、もう濡れてんじゃん」

嘲笑うような声の調子に、脳髓がぞくりと痺れを伝える。自分が貶められて興奮するなんて、被虐嗜好というのは本当にどうしようもない性癖だと自分で呆れてしまう。

暗くて先輩の手元が見えないけれど、下着をずらされている感触がある。腿に当たる、熱。あ、

「ま、待つ……」

空に虚しく消える制止をいとも簡単に振り切って、熱は胎

内を侵す。痛みや不快な感じはないけれど、ただ『行き止まり』にぶつかる『何か』の硬さだけは確かにある。

耳元に温い吐息がまたかかる。

「――、」

女の人の名前だった。私のじゃない、誰か知らない人の。

ああ、悲しい。何がって、他の女性の名を呼ばれたことじゃない。

そんなこと分かってたはずなのに、思い知らされたのが。

この人、私のことなんか見てないって改めて知らしめられたことが。

四肢が急激に冷えていくのが分かる。生身のはずの体がまるで陶器のように固まっていく。

胸の奥に広がった一縷いちぢるの苦味が、腹奥でぶつかる快樂の熱と溶けて混ざっていった。

「いつもはさ、こんなことしないんだよ」

言い訳じみた台詞が、耳元でぼつりと零れる。布団の中で後ろから抱きしめてくる腕は、どこか申し訳なさそうに優しい。

「じゃあ、なんで」

そう問うたところで、答えなんて分かっている。誰でもよかつたから私を適当に選んだ。そうに決まってる。

そんな当たり前のこと言わないで、と。無言の訴えを込めて、ウエストに回った腕を撫でた。

しばらく、私と先輩の間に静寂が流れる。でも、私の耳には喋ろうとも黙ろうともしない息遣いが届いていた。

「だつてさ」

抱きしめていた腕がほどかれる。手が伸びた先は、私の顎。

くいつとそちらを向かされたと思うと、下唇に指がそつと這わされた。

「なんであいつと同じ色の口紅、塗ってくるかな」

唇に這う感触へ、僅かに力が籠こもる。

……なんて自分勝手なんだろう。振られて、私に当たって、そのくせ私から誘ったとでも言いたいのだろうか。

そんな聞き分けのない子どもじみたワガママ、私じゃなきゃ張り倒されるところだ。

次は指の代わりに、その奥にあった唇が近づいてくる。

私なんてただの玩具がんぐ、きつと朝日が昇る頃には忘れ去られる。でも、今この人を優しく抱きとめられるのは私しかない。

そう思ってしまうから、玩具わたしは玩具わたしなのだろう。

チェリーレッドの口紅が、また少し薄くなる。